



## ひとを思いやる心

福岡いのちの電話理事

**林 覚 竜**

(南蔵院副住職)



昨年の11月に「福岡いのちの電話」理事に就任しました、南蔵院副住職の林覚竜です。「いのちの電話」を支えておられるボランティアの方々や、「いのちの電話」で救われる方たちのために、何かお手伝いできるように活動していきたいと思っています。

僧侶という仕事柄か、人の心や命について考えさせられる機会がたくさんあります。私は30代で、いわゆる就職氷河期の世代です。勉強して良い大学に進んでも、必ずしも報われるわけではない、自分自身のことで精一杯で、他人に構う余裕なんてない、そんな世代でした。

「情けは人の為ならず」という諺は「人に同情することは他人が利するだけではない。自分が行った善い行いは必ず自分にも返ってくるのだから、誰にでも親切にきなさい」という意味です。しかし、私が大学卒業の時期に行われた世論調査では、「情けをかけるのはその人の為にならないからするべきではない」と解釈している人が多いことが発表されました。そして今でもそう思っている人が実に大勢いるのです。これは自分のことは自分で解決しなくてはならない、誰も助けてくれないという考え方の現れのように思います。

現代の日本は、夜中でもお腹が空けばコンビニに行っても食べ物をいつでも買える。熱々の食事を持ってきてくれる出前もある。携帯電話があれば何でもできると言われる世の中です。誰もが、自分一人だけで生きているように錯覚してしまいます。しかし、一つの食べ物にしても多くの人に関わっていることを忘れてはいけません。生産、流通、販売。単純に考えるだけでも、一つの品物に関わる人の多さを想像することは難しくありません。

与えられるばかりで、与えることをしなくなるとは、

人と人との繋がりは消えてしまうでしょう。与えることができるのは、物質だけではありません。仏教には布施という言葉があります。今では報酬の意味が強くなってしまっていますが、元々は人に施すことすべてをさした言葉でした。眼施は優しいまなざしを向けること、言辭施はあたたかい言葉をかけることです。

普段の生活の中でも与えることができるものは沢山あります。時代が変われば悩みの内容も変わっていきますし、必要とされることも変わっていくと思います。しかしどのような時代になっても、布施の心の大切さは変わりません。互いが互いを思いやり、その善行が広がる布施の世が早く訪れることを願ってやみません。一本の電話に繋がることで、自殺まで思い詰めた方に笑顔がわずかでも戻り、その輪が広がる。そのような「いのちの電話」の可能性に期待を寄せ、微力ながらその支援のお手伝いできればと思っています。

### 熊本地震で被災された皆様には 心よりお見舞い申し上げます

今回の震災で「熊本のいのちの電話」相談員の皆様も大変な被害を受けられ、相談活動が中止となったことを受け、「福岡いのちの電話」では、北九州、佐賀、鹿児島各センターと協力して、「熊本のいのちの電話」にかかった電話を転送により、分担して受信しました。

「熊本のいのちの電話」からの転送は4月22日から5月24日までで、「福岡いのちの電話」では、5月3日から5月10日までを担当しました。

物心ともに、一日も早く被災からの復旧がかないますようお願いするとともに、これからも「福岡いのちの電話」にできることがあれば協力したいと思っています。

(福岡いのちの電話 事務局)